當家の下種論について

武田海正

下種論とは私共愚惡の凡夫が本佛から久遠劫來救濟されて居つたといふ、本化の信仰たる生佛關系を種子を播く事に譬へて論じたものである。

華嚴や眞言等の法は甚深なりと主張しても下種を論じない爲に小乘滅斷に同ずる。若し下種がなければ得脫もない筈である。他宗余經が爾前無得道墮地獄の根元と貶されるのはこの下種論がないからである。然るに法華經には本迹二門にわたつて下種論が說かれてゐる。故に下種論は法華獨特の法門であるといふべきである。本尊鈔には

所詮非二一念三千佛種一者、有情成佛木畫二像之本尊有名無實也。九三八

と述べられた如く、下種なき成佛、下種を論ぜずに成佛論を立つるものは無因有果の自然外道、因果撥無の反佛敎的邪義である。是の如く諸宗諸經の中に於て法華經獨り下種の法門を顯說してゐる。これが法華獨一の成佛と云ふ所以である。

法華經には下種の因緣を三箇處に說いてゐる。第一は序品の二万億佛の因緣、第二は化城喩品の大通結緣、第三は壽量品の久遠下種である。

台祖はこの中、第二三千塵點大通結緣を、下種として、迹門三益を立て、宗祖は第三、久遠下種に立脚して、未法下種を宣揚された。

妙樂が、迹門は大通を元始とし、本門は本因を元始とす、と云つた如く、迹門三益の化源は三千久遠大通結緣であり、本門三益の化源は壽量本佛久遠下種である。富木抄には

日蓮ガ法門ハ第三の法門也。一六四八

と示し三種教相には第三師弟遠近下遠近相、五百塵點。以二久遠一爲二元始一論二種熟脫一一五三と說いてる。この第三法門の內容は正しく本門三益である。故に下種論は、當家別頭法門の本づく處でありその根源である。

下種論は佛教思想の二大系統たる、一乘家龍樹等の實相論系の思想と、三乘家無着世親等の緣起論系の思想とを下種の譬によせて統一せんとしたものとも解釋し得るから、理深く義密に容易に解し難いが、當に一大佛教の思想的綜合統括と、世界的宗教としての歸結を示す指針の觀がある。卽ち十界本有と說く本覺的實相論を、生佛迷悟の差別ありと說く、始覺的緣起論的表現樣式によつて、潤色し組織し論述したものである。

而してこの下種論は、本佛の無限の慈悲とその無盡の救濟を顯はすものである。久遠劫來過去遠々

現在滿々未來永劫にわたつて、本佛の御本懷は衆生濟度の一大事因緣より外には何ものもないのである。その衆生濟度の本源は正しく下種である。故に他の法門もさることながら、この本佛の大慈悲の基くところ、その化導の根本たる下種論だけは、徹底的に信解しなければならないと思ふ。

大救世者本佛釋尊の每自悲願の大願は藥師の十二願、彌陀四十八願、悲花經の釋尊の五百大願、法華經譬喩品の能爲救護の本願等あらゆる諸佛の別頭末願の諸願を綜合し、それ等にも超過せる如我等無異の總本願である。

御義口傳に曰く、釋尊の總別の二願とは我等衆生の爲に立て玉ふ處の願なり。二七

壽量品の良醫段はこの本佛の大慈悲根本誓願力を最もよく具体化して徵象した譬說である。宗祖の御指南によれば、良醫とは本佛釋尊であり、子とは我等衆生であり、毒藥とは權教方便であり、失心とは謗法であり、良藥とは南無妙法蓮華經であり、遣使還告とは宗祖である。これを法門によせて因果論的に組織したのが所謂久遠下種の法門である。

納種在識永劫不失といへば久遠下種の上に更に大通下種等の如く重ねて下種する事は許されない筈である。然るに天台文句に四節三益を說いて居る。それは第一久種現脫、第二久種近脫、第三近種現脫、第四現種當脫である。第一第二は共に久遠下種であり、第三は大通下種、第四は靈山下種である。

前二者には再種義はないが、後二者は確に再種、若くは復種である。この再種復種は迹門當分に約するから立つのであつて、本來下種には再種復種義は成立しないのである。

壽量品
- 久遠下種——中間熟——本門脫——彌勒等
- 久遠下種——過去熟——近世脫——地涌千界

化城品——大通下種——四味熟——迹門脫——舍利弗等

滅　后——靈山下種——次世熟——正像脫——五千起去等

右圖の如く下種には久遠、大通、王城等の諸下種をみるが、事實ある眞正下種は久遠下種の一下種のみである。久遠下種以外の諸下種は佛の常在敎化を示す爲に天台が抽象的に分立したまでゞある。

久遠下種とは本佛下種、本因下種または十界下種とも謂ひその內容は本佛の出世の本懷たる每自悲願の下種である。壽量品の佛たる良醫は失心不失心の諸子に、平等に色香味美の良藥を與へた。卽ち本佛は十界に等しく本因佛種を下したのである。日向記に

十界平等に授くる所の妙法なり　五三

と曰へるが如く、十界平等の下種であるから久遠下種已後は十界悉く佛子である。卽ち取要鈔に「此土我等衆生五百塵點劫已來敎主釋尊愛子」と說けるものである。

久遠下種の種たる本因佛種は本有の性種であらうか。それとも修得の乘種であらうか。若しこれを本覺的にみるならば佛種非佛種の名目を絶し、性乘何れとも定め難い。かゝる單本覺の種はまた衆生の實益にも何等關する所がないのである。由來天台では迹門三益を立て今番脫益の衆生實益論に立脚して、大通結緣を以つてその化源とし、その種を修得佛性と定め、久遠下種を理佛性、性種、正因佛性と說く樣である。文句に譬喩品の五百子を正因の子とし三十子を緣了の子としてゐるのに明である。これに對して當家は本佛の每自悲願の重に立脚し本有三因佛種をも乘種とする。何者、久遠下種の種子は無始古佛の本願力によつて擣篩和合されたる事一念三千佛種だからである。今經には擣篩和合與子令服と說き、本尊鈔には

一念三千佛種乃至是好良藥壽量品妙体宗用敎南無妙法蓮華經是也　九四四

と釋されて疑ふ余地がない。昔円は性具三千を明さず迹円は事一念三千佛種を說かぬから共に佛果の眞因とはなり得ない。これ本尊鈔に爾前迹門の円敎すら佛因に非ずと貶された所以である。かくて一大佛敎中法華本門壽量の極說たる久遠下種のみ佛果の眞因である。

大救世者本佛尊の每自悲願の顯現たる本因下種は迹門大通下種の如き單なる衆生の實益たる成佛不成佛には拘はらない。卽ち日向記に

善人惡人二乘闡提正見邪見の者にも妙法の雨を惜まず平等にふらす　四二

と說けるが如く、久遠本佛はその機類の如何に拘らず十界へ平等に惜みなく救ひの佛種を下したのである。即ち利鈍順逆の吾子の爲に平等に大慈悲を被らしたのである。

斯の如く本有三因を十界平等に下したのにも拘らず、事實、實益の上では救濟遲速、乃至成不成の差別が生ずるのは如何なる理由に基づくか。なる程、佛出世の本懷に約すれば、久遠下種已後は十界平等に悉是吾子、即ち悉く佛子であらねばならぬ。然るにこれを機情にすれば、十界の衆生の中には、自ら根の利鈍、障の輕重あるによつて、本所持を忘れたる者、忘れざる者、本心を失つた者、失はぬ者等の差別が生ずるのである。即ち日向記に

仍て釋尊の御子にも物に狂ふ子もあり。不孝の子もあり。孝養の子もあり。　五四

とある如く、本所持を忘れざる不失心者は、佛意に隨順するから孝子といはれ、忘本所持の失心者は、飲毒背大化の故に不孝の子と云はれるのである。

斯樣な理由のもとに、每自悲願の下種は十界平等なるにも拘らず、實益の上では差別が生じたのである。と同時に佛意と、機情との二つの立場の相異によつては、同一佛種を論ずる場合も自ら別種の如くみゆるのである。

卽佛意に約すれば已施大化の乘種であり機情に約すれば忘本所持の性種でもあり、始覺卽本覺の行佛性でもある。要するに本種を佛意に約して十界下種となし、久遠下種と談ずるのが、當家の下種論である故に佛種は理佛性でなく乘種たる始覺卽本覺の行佛性である。種体は無始本有の十界事常住事一念三千佛種である。

斯の如く久遠下種とは無始久遠の元初本佛釋尊が一切衆生救護の爲に十界平等に事一念三千佛種を下ろされた謂である。然るに機類に利鈍順逆の差別があつたので或は得脫し或は三王流轉となつた。かくて久遠下種已來中間得脫結緣門脫乃至本門脫正像入實等の無量無邊の機類が、如我等無異の佛誓に叶つて成佛したのである。その三五下種を忘れ在世結緣にも漏れたる我等余失心者は末法今日まで流轉して來たのである。卽ち開目鈔に

強盛の惡緣に落されて佛にもならず。しらず大通結緣の第三類の在世を漏れたるか久遠五百の退轉して今に來るか　七六九

と云へるものである。三五流轉の余失心者は本未有善の最惡機であるから本佛無緣の慈悲たる妙覺の種子、本善妙種を殖ゑなければ拔濟する事ができない。こゝに末法下種の超悉檀根本大化導が起るのである、

久遠下種と末法下種との關係如何。先ず先驗的目的論的にみれば久遠下種は眞正の下種であり、末法下種は結緣か熟益か聞法下種である。次に經驗的機械論的にみれば久遠下種にも眞正の下種あり或はさうでない下種ありまた末法下種にも眞正下種あり熟益あり結緣もある。前者は價値的宗教的所論であり後者は價値關係的科學的所論である。故に前者は一佛三益に確定し、後者は日蓮本佛の下尅上論に陷る憂がある。

大通下種と末法下種との相異如何。大通當機は久種近脫の最利根者に對すれば鈍根であるが末法當機たる余失心者に對れば不心失の一類である大通結緣の第一類常住大乘の機は現座に得脫し中間に入實し、第二類退大取小の機及び始終住小の第三類は今番乃至正像に得脫し終つたのである。然るに末法のそれは一同の逆緣であり。展轉至無數劫である。尤も順緣門下は現世に熟脫もしようが、爪上の土で殆んど問題にはならぬ。機類が是の如く異るやうに下種も自ら相異してゐる。卽ち大通下種が久遠下種發心の熟益であつたのに對し末法下種は久遠の失心者であり久遠下種の功を奏しなかつた一類たる久遠結緣の下機の爲に事一念三千佛種南無妙法蓮華經を下すのである。

諸御書によれば末法の通機は逆緣である。逆緣とは謗法である。謗法とは佛智疑惑の根本無明であり、本佛への背反である。壽量品の意によれば失不失の十界の衆生悉く佛化を懇請し、その請に應じ

て父本佛は平等に良藥の佛種を下した。余失心者はこの妙藥をのまない。これ佛智に對する疑惑であり、父本佛に對する背反でなくて何であらう。かく末代惡世の我等は皆悉く過去遠々劫より父に背き久種の寶珠を忘れ謗法の罪惡を重ねて來たのである。故に壽量品には余心失者爲治狂子と說き、信解品には醉酒而臥と示し、日向記御義九五本尊鈔九四四開目鈔七六八八一六唱題鈔三二三新池鈔一八四九秋本鈔一九三八等には失心者不孝子と釋してゐる。然らば末法當機には本來下種が無かつたのか。佛意に約すれば正しく每自悲願の下種を被つたのであるが、强盛なる惡緣に誑されてそれを忘失したのである。故に御義口傳には

失とは本と有る物を失ふ事なり。九五

とあつて末代の我等は久遠の感應幽微なる久遠の失心者なる事を証してゐる。人性に對する省察が自己にまで深められた時宗祖は自らの過去に於ける謗法罪を懺悔しないでは居られなかつた。その事は開目鈔八一七減罪鈔一〇一三兄弟鈔一一三四善無畏鈔一三四八等に明である。

斯の如く久遠下種を自覺する處に永遠の救ひがある。久遠の謗法の大懺悔と同時に來るものは本來覺了の大法悅である。玆に謗法の重罪人は一躍して本覺果海に住し、本佛の寶兒となり、吾本化上行縮遣一一三五　一三八九　一四二八　一五一四　一八〇七　一八四三　一八七三　一九二五　二〇〇八　と名乘られた。一介

の貧僧は忽ちにして佛勅を被むつた如來使となり、具騰本種して久種近脱の上機にかへつた。故に宗祖の大慈折伏下種結緣の唱題は久遠本佛の信であり、叫びであり、行であつたのである。この事實こそ我等末代の機類が法華値遇の大緣を久遠に結んである唯一の證權　縮道　二六四　七四四　九六四　一七六〇

一八四九　御義　五一である。實相鈔には

皆地涌の菩薩の出現に非んば唱へ難き題目なり　九六一

とあれば順緣門下は悉く久種近脱の上機に騰るわけである。而して朝夕に唱ふる題目の聲は本佛の聲なるが故にそのまゝ絶對折伏下種結緣の毒鼓の響逆謗救濟となるのである。

謗ずる人は大地微塵の如し信ずる人は爪上の土の如し　秋元鈔　一九三八

大地微塵の如き逆順は先天的に正法を敵視し法華經の行者に迫害を加へるから、而强毒之の題目の利劍を以つて此を摧殄し一日も早く正法の味方としなければならぬ。日向記には

元品の無明の大良藥は南無妙法蓮華經なり。　五八

南無妙法蓮華經の大音聲を出して諸經諸宗を對治すべし　六九

と說ける如く、謗法逆緣の根本無明を駭動し久遠下種を開發し、本種の覺芽を萠動するのが末法下種唱題の本趣である。

末法下種の種子は久遠下種のそれである。卽ち事一念三千佛種たる南無妙法蓮華經である。それは法要書一七一七御義口傳八六　九〇　日向記六　本尊鈔九四四　等に明である。然らば末法下種にも漏れたる逆緣衆はどうなるだらう。

若し此の題目の本心を失せんに於てはまた三五塵点を經べきなり。但如是展轉至無數劫なるべし。

日向記　七四

と未來永恒に流轉しなければならない。これを思へば生命を賭しても拆伏唱題を宣傳せずには居られぬでないか。

× × × ×

一佛三益種熟脫の法門を說かなければ本佛の化意悲願も衆生の實益もわからない。就中この下種論を述べなければ本佛無盡の救濟の源泉を明かにする事ができない。のみならず末法時機相應の大白法たる法華本門の肝心妙法五字七字を末代の一切衆生に下種しなければならぬ所以の妙宗のよつて來る淵源が顯れない、實に下種論はこれ等諸問題に對して根本的解答を與へ、以つて一佛三益の根元を究め、記小久成の二實開顯のよつて來る本源を明かす一大佛敎の根本問題を解決する寶鑰である。

因に富士門流の如きは久遠下種を失ひ末法下種に迷ひ、その種体論に於ては種勝脫劣の謬論を生じ

また導師論に於ては單に脱迹の佛を捨つる事を知り種本の本佛を仰ぐ事を忘れ宗祖本佛の下尅上の邪義に陷つてゐるやうである。

たどるべき道

吉田孝秀

挽近、物質文明の進歩に伴ふ弊害として、道德宗教の衰頽した事を頻りに慨嘆するのが一般識者の通說の如く思はれるが、此れを大局から公平に見たならば、物質文明の進歩は一面弊害を免れないが、現代に於て此の物質文明、機械文明程偉大なる貢献を人生に齎らしたるものは恐らく他に其比を見ないであらう。無論他面道德宗教等の衰頽は事實であるが、畢竟其は道德宗教の力がその社會に權威を持たなかつた結果生じた所の弊害でその責は當然「自ら」負ふべきであると私は思ふ。

物質文明の進歩に依つて衰頽を來す樣な道德宗教は、何としてもその時代に力のないものであつたと言ふの外はない。然も精神界の多くの人達は依然として時代錯誤の舊套を脱し得ないで、頽勢を挽回する事にのみ苦惱してゐるが、むしろ我々は速かに一切を擲つて、先づ精神生活の第一義に醒め自由な